

はじける こころ

vol. 19
2008年4月号

人権の宝島：聖母被昇天学院中学校高等学校の
社会科人権学習
大阪「釜ヶ崎の夜回り」に参加して……………1-2

はじける笑顔 子どもたちの出会いで元気なまちづくりへ
(1) 第三中学校3年生とせいなん幼稚園の園児たちの交流……………3
(2) 北小学校の異年齢交流 くすのき活動……………4

エッセイ：
キャベツと、おちゃわんと、ハブラシ かわのひでただ……5-6

とどろみの森のちいさな音楽出前演奏隊
止々呂美小学校3～6年生……………7



げんげの：「げんげ(紫雪草)」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

げ ん げ の の ペ え じ

●写真募集！●子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。

みのおから世界へ！ 人権文化の花束を！

はじけるこころ ●みのおから世界へ！ 人権文化の花束を！

♪とどろみの森のちいさな音楽出前演奏隊

2月28日(木)箕面森町インフォメーションセンター(森町バスターミナルのところで)で止々呂美小学校の3年生から6年生10人と教員6人が出前演奏会をおこないました。近隣の方や住宅関係者約30人が演奏を楽しみました。止々呂美小学校では、6年前から地域に出て行き、いろいろな場所で演奏会を開いてきました。

4月からいよいよ「とどろみの森学園」として小中一貫校がスタートします。止々呂美の子どもたちに箕面森町から来る子どもたち、それと市内小中学校からの特認生が加わり、約70名となる予定だそうです。(現在小中学校32名)地域一人ひとりのつながりのある現在の止々呂美の良さを、小中一貫の新しい学校づくりとともに、今の地域の人たちと新たな森町に住む人たちをつなぐ新しいまちづくりへと、学校が中心となって活躍していく姿が今日の演奏会で感じられました。

止々呂美小学校出前演奏を見学して

人権教育推進会議市民委員 谷口俊美

今年で6年目を迎える止々呂美小学校の出前演奏を見学させていただきました。

4～6年生まで7名(当日1名欠席)で、バンドは結成されており、「いっしょに育った仲間」として一人ひとりがお互いを認め合っている様が印象的でした。幼い頃からお互いを知っていることは、良いこと、困ることがたくさんあったことでしょう。でも、拝見する限り、これまで培われてきた信頼関係により、良い面が引き出されていると感じました。又そこに、先生、地域の方が加わり、いっそう一体感がはぐくまれていたように思います。

4月から、小中一貫校「とどろみの森学園」が開校します。箕面森町や特認校制度※を活用した新しい仲間が加わり、1～



9年生のワンフロアーの学校になります。校長先生に「不安はありませんか？」とお聞きすると、「不安はありません。異年齢の交流活動を通じて、子どもたちはすぐに仲良くなりますよ。」とのことでした。

これからは、教職員の皆さんと、子ども、保護者、地域の方が力を合わせて、止々呂美のよさを生かした新しいまちづくりが進んでいくと思います。子どもたちの素直な気持ち、笑顔がその橋渡しをしてくれることでしょう。応援しています。

※「特認校制度」…従来の通学区域は残したままで、特定の学校について、通学区域に関係なく、市内のどこからでも就学を認める制度(「もみじだより平成19年10月号」P7より)



地元のみなさんといっしょに歌いました。

人権教育推進会議情報誌『はじけるこころ』

発行 箕面市人権教育推進会議

箕面市教育委員会

人権教育課 TEL072-724-6921 FAX072-724-6010

e-mail: eduinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成20年(2008年)4月

人権教育推進会議委員

平沢安政、守婦朋子、小関麻沙好、平沢清美、河野秀忠、小林和幸、安東由紀子、森木綿子、谷口俊美、昌元真己、福永茂、田中はるみ、細井末子、渡辺由美、赤川隆洋、竹綱珠衣、倉橋利治、平林和男、重松 剛、森田雅彦、奥山 勉、井上隆志、稲野公一、若狭周二、森井園夫、向井裕彦、笹川実千代、真鍋あけみ、中村信隆、長沢 均、水野賢治、千葉重紀子、津田善寿、黒崎敏孝、小西敏広、黒田正記、大浜訓子、吉田卓司、辻 広志 中井正美、森 和則、桂木洋一

「はじけるこころ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。公共施設においています。

公開ホームページ: <http://www2.city.minoh.osaka.jp/EDUJINKEN/JINKEN/jinken.html>

大阪「釜ヶ崎の夜回り」に参加して

大阪市西成区に仕事を求めて人々が集まる「釜ヶ崎」という場所があります。「釜ヶ崎」の寄せ場（日雇い労働者が仕事を求めて集まる場所）は、高度経済成長にもなつて大きくなつていきました。1970年の万国博覧会開催前の開発ラッシュの時期には、労働者を確保するために国の政策もあつて、全国から仕事を求めて人々が集まつてきました。その開発ラッシュが終わつた後現在まで、多くの労働者が仕事を求めて集まる場所として知られています。最近では、「野宿をしている労働者に対する襲撃事件」など若者が理由もなく暴行を加えることや、「ニート」「ワーキングプア」などの労働者や賃金格差の問題が大きな社会問題となつていま



支援者の方々の聞き取りをして、夜回りに出発しました。

仕事を求めて「釜ヶ崎」にきて、うまく仕事につけなくて、しかたなく野宿する人々もあり、特に冬はそのために※命を落とす人

もいます。野宿をしなければならなくなった理由はさまざまですが、一気に今の状態となつたわけではありません。失業、借金、病気、家族離散等いろんな事情が重なつた末、野宿をしなければならぬ状況となつている例がほとんどです。しかし、定職について今の状態から抜け出すことは、容易ではありません。そのために、支援者が生活保護の手続きに付き添つたり、「夜回り」で生活に必要なものや情報を伝えたりしていくことで、このような状況から抜け出すための支援をしています。

聖母被昇天学院中学高等学校では、20年前の昭和62年（1987年）から社会科人権学習として、「釜ヶ崎」を訪問して今年で18回目となりました。きっかけは、公民の授業を受けていた生徒自らが「釜ヶ崎」を訪問したいと言つてきたことからでした。さらに西成にある修道院が聖母被昇天学院の経営母体であつたこともあり、この活動は始まりました。毎年「釜ヶ崎」訪問をした生徒たちは報告集を作成しています。その報告集を読むことで参加できる年齢になつたら自分も行きたいと思う後輩たちが出てきます。生徒たちは、訪問するまでに学校で事前学習をしてから「釜ヶ崎」に行きます。そうやってこの20年間ずっと引き継がれてきています。今年も2月8

日に、生徒10名、社会科教員3名と被昇天小学校の教頭先生が「釜ヶ崎」を訪問され、私たちも同行しました。

※昨年度大阪府での路上での死亡者数…約100名（2007年1月国が実施した全国調査から）

釜ヶ崎研修に参加して

高1 藤崎由理恵

午後10時を過ぎ、実際に夜回りを開始した時、はじめはやはり「怖い」という気持ちで抜けず、私は何もすることができませんでした。ただ車の中からリーダー達の行動を見ているか、車から降りられてもリーダー達の後ろをついていくだけ…。何もできない自分に本当に腹が立ち、悔しく思いました。「何のために来たんだ、このままではいけない」そう思つた私は、その時から積極的に行動するようになりました。

「こんばんは、こんばんは」そう言つても、なかなか反応をみせない労働者の方。しかし「夜回りの者です」そう言うと、すぐにダンボールや毛布の下から顔を出してくださいました。私はこのとき「野宿の方が襲われる事件はまだまだ頻繁におこっているのだから」と少し悲しくなりました。「野宿者の方達に怖い人はいない」そう学んでいたはずなのに、初めて声をかける時は本当に緊張しました。でも実際に野宿者の方に話しかけてみると、そんな緊張も、誤つた恐怖感もすぐに抜

けていきました。野宿者の方には紳士的な方も多く、私が声をかけると、眠っていたにも関わらずわざわざ起き上がりしっかりと話をしてくださいました。

「ありがとう」普段から聞きなれているはずの言葉なのに、今日はなんだか違う気がしました。にこにこ笑いながら話してくれる姿を見た時、私は今まで一方的に野宿者の方に対して「怖い」という気持ちを持っていたことを本当に恥ずかしく思いました。

夜回りをしている最中にふと顔を上げると、すぐ近くにとても大きく通天閣が見えました。大阪の中心地である場所のすぐそばに、厳しい生活をおくっている人達がたくさんいるという現状に改めて気付かされ、大きくショックをうけました。私はどこかで「日本は先進国だし恵まれている」そうぼんやり思っていました。偏見や差別…そんな苦しい現実が私達が住む街にも、まだまだ残っていました。そんな現状に気付いたものの、正直今の私にできることはあるのか、それは何なのか、私にはまだわかりません。でも「何かしたい」そう強く思い始めました。

釜ヶ崎の夜回りに参加して

人権教育推進会議委員 竹綱珠衣

人との出会いがなければ、人権教育は理屈でしかなく、理屈は他人事になりやすく、当事者感はなく持てません。当事者感とは自分事であり、他者への思いやりのイメージ力（想像力）であり、このイメージ力を育てるのが人権教育だろうと考えています。聖母被昇天学院の社会科の活動としてとりくまれ続けている「夜回り」はまさに人権教育です。今回、私は夜回りの真の意味を、少女

達の姿や気持ちに出会ふことを本当に嬉しく思いました。

被昇天の修道院での事前学習を済ませ、希望の家に移動し諸注意を受けグループに分かれていよいよ夜回りに出発します。夜の10時過ぎ、リアカーを引きながら、路上で寝ている人を見かけては「夜回りです」と声をかけていきます。返事がなくても、肩の辺りを見て呼吸をされているようであれば就寝のじやまをしないよう通り過ぎます。返事があれば「お身体大丈夫ですか？ お腹がすいていたらおにぎりとか温かいみそ汁やカイロを用意できますよ。」と声をかけます。寒そうな人や何もかけずに寝ている人には毛布を、路上に直に寝ている人には体温を奪われないように段ボールを提供します。また、あらかじめ決められた地域では下着のシャツの寸法を尋ね配給をしていきました。そんな一つひとつが、自分自身を暖かくしていき、野宿している人たちを愛おしく感じる不思議な感覚を覚えました。

私が最初に声をかけた人は座って寝ていました。が、上げた顔はすぐ若く30歳前後に見えシヨックでした。「どうしてなんだろう」「親はいないのだろうか」「親はいても帰れないのだろうか」、そんなことを瞬時に考えてしまいました。我が子に年の頃が近かつたからかもしれません。10年続いているというリーダーは、誰がいつもどこで野宿しているのか把握していて、名前を呼びかけたり、見かけない人には声をかけいつもどこにしているのか、年はいくつなのかと尋ねておられました。51歳、57歳、61歳…私と前後する年齢の方が多かつたのですが、年齢より随分老けて見え、積み重ねられた苦勞や置かれた状況の厳しさを感じました。

夜回りの初めに、一人の人間として接するように



深夜、夜回りからもどつてそれぞれの思いを交流しました。

といくつかの注意を受けましたが、ごく自然な行為ばかりでした。自分がその立場だったら、立ったまま、ポケットに手を突っ込み、上から見下ろしながらいくらか優しい声かけをされて

も、決して有難いなどとは思わないでしょう。反対に恐怖心を持たせたり、怒りを感じさせてしまうことでしょうか。また、暖かいおにぎりだつて軍手をした手からはもらいたくないでしょう。素手で渡した時に触れた冷たい手に一人の人間を感じたと語つていた生徒さんがいましたが、「野宿者」という言葉で束ねた人ではなく、まさに一人の人として感じた瞬間です。初めは怖かつた感じた少女達が、一人ひとりに膝をつき、声をかけて、相手の要望に応じていくという経験を重ねていくうちにその怖さを忘れていったのは、ここに一人の人がいるという実感（環境や立場を超えて人間として触れ合う実感）からでしょう。

どのような立場の人であつてもその人に対する敬意の念（気持ち）を忘れたら、きっと私達は横柄で傲慢な偽善者になってしまうでしょう。夜回りを終わつて深夜2時の布団の中で、「人間の尊厳」という言葉が浮かびました。

はじける
笑顔

子どもたちの出会いで元気なまちづくり

第三中学校3年生とせいなん幼稚園の
園児たちの交流

1月27日(月)

①家庭科「保育」…園児とたごづくり
②選択授業「体育」…園児と体を動かす

第三中学校を中心として、西南小学校・せいなん幼稚園・瀬川保育園の施設が近くに集中しています。その中で幼稚園の園児と中学校の生徒がたごづくりや体操をいっしょにおこなっている授業を取材しました。幼稚園児の成長とともに中学生もこの取り組みをおして様々なことを学ぶ場となっています。

生徒の感想

○本当に少ししか時間がなかったので、少ししか遊べなかったけれど、それなりに楽しかったし、とても可愛らしかった。風もちゃんと揚がったから向こうの子もとても満足してくれたと思う。反省点はもう少ししゃべった方がよかったと思った。でも、受験の忙しいときに、こうやって遊べたのは気分転換にもなったし、励みにもなったからうれしいし、楽しかった。また遊びたいと思った。

市民委員の感想
地域コミュニティの再構築は
子どもたちの出会いから

箕面三中とせいなん幼稚園の子どもたちはフェンスを挟んで隣り合っています。フェンスに扉があり、子どもたちの出会いはそこから始まっていました。その日は、中学3年生が屏から幼稚園に入り、家庭科の保育の単元学習の実践です。先生のお話をみんなで聞いた後、さあ中3と園児の風作りです。

「尊敬・憧れ」なんだろう！

中学の体育の先生の指導で、お互いの紹介↓ペア組み↓ゲーム活動が展開され、広い体育館の中を所狭しと両者が走り回っていくうちに、彼らの年齢差も体格の差も、見分けがつかなくなっていました。きっと園児たちの小さな体から湧き出る活力と無心さに向き合うことで、中学生たちも理屈抜きで童心に返り、素直に活動を楽し

んでいる様子だったのでしょう。あつという間に授業が終わる頃、小さいと侮れない動きの園児たちに振り回された中学生たちの頬はほてり、目はきらきら輝いていたのを見て、大人の私たちは寒い体育館に立っていたのも忘れるような感動すら覚えました。

後で中学の担当の先生から、その活動をあえて中三のこの時期にする意味を伺い、深いストレスを抱えながら

2 北小学校の異年齢交流

くすのき活動

北小学校は、全校児童252名の箕面市内でも小さな学校です。その児童数が少ない特長を生かしたとりくみが、『くすのき活動』です。昭和55年（1980年）から『くすのき活動』が始まりました。1年生から6年生までを12グループに分けて5、6年生のグループリーダーを中心に1年間いろいろな行事をおこなって縦のつながりを深めています。

2月1日(金)『くすのきおなわとび大会』が開催されました。全校児童が12のグループに分かれ各グループ内でAとBの2チームつくり、8の字とびで何回飛べたかを競いました。高学年の子どもたちが大縄を回して、低学年の子どもたちが飛びやすいように声をかけながら数を数えます。高学年のお姉ちゃん、お兄ちゃんが低学年の妹や弟にやさしく接している様子があちらこちらで見られました。

◆年間のくすの木活動

月	くすのき活動 活動内容
4	グループ結成・出会いの会 自己紹介とゲーム。
5	くすのき遠足 箕面の滝まで班毎に歩く。おにぎりを食べたり、遊そんだりしてくる。
9	くすのきリレー 運動会のプログラムとして実施。
2	大なわとび大会 12グループ対抗で回数を競う。

低学年の子どもたちは、高学年の子どもたちの行動をモデルとして自分の将来像を描いていきます。このことはキャリア教育[※]でも大切な視点であるといわれています。北小学校では、人権教育の基礎として、今後この活動を大切にしていきたいと考えています。

◆児童の感想から

○ぼくは、低学年のころ、高学年のお兄さんたちに、やさしく親切に、いろいろな教えてもらいました。そのとき、ひとりのお兄さんが、おもしろい歌を歌ってぼくを笑わせてくれました。ぼくは、今年のくすのき遠足で、リーダーだったので、みんなにやさしく説明してあげることができました。そしてみんなを楽しく笑わせたりして連れて行くことができました。

2学期の運動会では、くすのきリレーで学校全体の指示をしました。練習の時はふつうにできたけど、本番になるとお客さんたちがたくさん見ている中で朝



大なわとび大会

次々生物を描く園児に「なあ、この中で強いんだねん？」と、園児と同じ目線（心かな）で聞いかける中3、なかなか絵を描こうとしない内気な子を相手に、あの手この手で口どいたり、ご機嫌を取ったり苦労する中3、ほめ言葉のうまい中3、園児に押され気味の中3、いろんな中学3年生がそこにいました。いよいよたご揚げです。園児より楽しげに風を持って走る中3、さりげなく援助する中3、一緒に走る中3、絡んだ2つの風の糸を真剣にほくくの中3、時々三輪車に乗りたくなる中3、園庭にもいろんな中学3年生がいました。

身体を動かす、いっしょに物を作る行為は、人と人を簡単に近づけてくれることを目の当たりにしました。この出会いはこの時間で終わらず、まちで出会った時、懐かしさと恥ずかしさと嬉しさとそんな気持ちを持たせてくれることでしょう。怖さや憎しみを持った出会いにはならないはずです。地域のコミュニティが薄くなって、人間関係が取り結びにくいのが昨今の現状ですが、こんな体験をした子どもたちがまちで再び出会ったとき、元気なまちが生まれそうです。地域コミュニティの再構築は子どもたちの出会いによって起こりそうな予感がありました。

人権教育推進会議委員 竹綱珠衣

第三中学の体育館に、選択授業（体育）の中学生21人とせいなん幼稚園の年少組37人が互いに向かい合っただけで座って授業が始まりました。幼稚園児の後ろから参観していると、園児は皆正座していて、小さな足がずらり、きちんと並んでいるのに驚きました。園の先生にいつもそう座るように指導されているのか尋ねると、そうでもないと言う。ということは、広い体育館の真ん中で、自分たちの倍以上背丈のあるお兄さん・お姉さんたちに向かって初対面の挨拶をする園児たちの心境は、自然と

学校生活を送っている彼らに同情すると共に、大人の手を借りずとも、身近な異年齢の交流の場を持つだけで回復する気力を、まだ彼らが持ち続けていることに希望を見ることができました。私たち大人ができること・するべきことは何なのか、ヒントは彼らから学べると思いました。

人権教育推進会議委員 平沢 清美

礼台の上でやるので緊張しました。でも、頑張って練習どおりすることができました。はじめてお客さんがいっぱいいる中でしゃべることができたので、とてもうれしかったです。



5月のくすのき遠足。いっしょにおにぎりを食べました。

○私が低学年、中学年くらいの時は、話す人がいなかったり、他の理由であまり好きではありませんでした。だけど、リーダーになって低学年や中学年の子たちとよく話をするようになってから、くすのき活動が前より好きになりました。

出会いの会では、いろんなゲームをやったり、くすのき遠足では滝に行く道をまちがえずみんなを連れて行ったり、運動会ではみんなで力を合わせてボールを運んだり、いろんなことがありました。おなわ大会は、みんなと楽しみたいです。

※「キャリア教育」…児童生徒一人ひとりのキャリア（職業観・勤労観）発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育（2006文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育素真の手引―一人ひとりの勤労観 職業観を育てるために―」より）

キャベツとおちゃんやわんやハブリン



かわのひでただ

秋やいつのに、暑い夏日がまだまだ続いている。この夏の初め頃に、オカンがホスピスに入院して、病気で死んだ。なんかワケ分からんうちに、やさしゅう、死んでしもった。残ったんは、オトンと中学生の妹のセツコと、オレの三人。

で、今日の朝ご飯のときや、オトンがな、
「冷蔵庫にキャベツが無くなったなあ。」

って、いいよねン。それが気になってなあ。夕方、勤め先の障害者市民事業所の仲間にバイナラしてから、大急ぎで近所のスーパーに行って、キャベツを一ケ、買ったんや。この頃は、夜が早いやろ、五時半になると、もう真っ暗やデ。オレは、電動車イスやから、夜道は、ちょっとヤバイんや。それで、とっと帰った。

帰ると、台所のテーブルに、キャベツが一ケあるやないか。セツコが買って来たんやと。三人で、キャベツ二ケは、多いやろ。しばらくすると、オトンも帰ってきた。オトンは、ビニール袋に入ったキャベツをぶら下げてた。親子三人、顔を見合わせて、
「みんな、アホやなあ。」

って、ケタケタ笑ったけど、急に悲しゅうなって、涙が出た。

先週の日曜日、久しぶりに焼き肉でもやろって、三人で準備したんや。オカンがいてたらキパキヤろけど、なんかバンラバラや。それでもエエ匂いが台所一杯になって、サア、ご飯や。セツコがおちゃんやとハシ、お皿をならべて、いただきますした。でも食器棚には、一ケ、おちゃんが残ってるねン、オカンの分や。三人とも、そのおちゃんの方を見ないようにして、だまってご飯を食べた。三人しかおれへんの、おちゃんやわんや四ケあるんやデ。

オトンは、オレの口に焼き肉とご飯を交互に入れながら、自分は、焼き肉をつついて、焼酎を呑む。セツコは、どんどん食べる。

突然、オトンが残ったおちゃんを見ながら、むずかしい話を始めた。

「にんげんは、何百万年もかかって、やっとこさ今いるんや。その間に、災害や病気、地震や戦争が数え切れないくらいあった。それを、かいくぐり、かいくぐりして、赤くて細いいのちの糸をつないできた

んやデ。つながった糸の何百倍、つながりたいと願いながら切れた糸があるのにや。母さんも、その糸を持ってたんやな。ほいで、その糸は、確かに、おまえら二人につながれたんや。母さんは、それを確かめるために、あの食器棚のおちゃんを残したんやうんかなあ。そやからな、ひとは、自分で死んだらアカンのや。ひとを殺してもアカン。ひとのいのちの赤い糸が切れてしまつ。どないかして、赤い糸を次の時代や世界中のこどもらに、つながなアカンのや。それがにんげんの生き方や。母さんは、それをおまえらに教えて、やりとげて、生れる前の時間に帰って行ったんやと、父さんは、想ってるんやけどな……。父さんは、そんな母さんが好きやった。……」

と、悲しい色のテレ笑いしながら、焼酎をガバツと呑んだ。ほんで、ケホケホとむせた。なんやエライたいそつな話で、むずかしいけど、なんとなく分かるような気がしたから、不思議や。だれにもいうてへんけどな、ホントは、オカンが死んで、オレは、落ち込んでんねン。それを知ってるから、オトンは、オレをなぐさめるために、たいそつな話をしたんやろつな。けど、オトンの方がアカン状態になってるんを、オレは、知ってるんやデ。どないしてエエが分からんけどなあ……。

ご飯が終わって、お風呂のスイッチを入れるために、オレがゴソゴソと風呂場にいざって行くと、セツコが洗面台の前で、ひとりで泣いてた。手エにオカンが使ってたハブラシをにぎってた。

「セツコ、おまえもやなあ。よう考えたら、世界中にセツコやオレのように、ひとりで泣いてるひとが、ぎょうさんいてるんやと思う。せやから、どつき合わんと、オカンとオレらのように、手エつないで生きていたらエエのになあ。」

って、ひとりごちたら、なんか塩っぱいハナ水が、また出た。

オトンは、今夜もまた呑んでる。秋の夜は深いし、風は、チョッピリ冷たいから、からだこわさんように、頼むでエ。なあ、オカンが好きやったオトン。

みんなではなしあうトント

- あなたのおともだちに、お母さんや、お父さん。近しいひとを亡くしたひとはいますか。そのような話をしたことがありますか。
- いのちの赤くて細い糸とは、どのようなものでしょうか。
- いろいろなひとたちが、「いのちは、大切」といいますが、あなたにとって、いのちとはなんですか。
- あなたは、おうちで買い物などのお手伝いをしていますか。
- オトンの話は、むずかしいですか。大人は、なぜ、お酒を呑んだり、タバコを吸ったりするのかな。先生といっしょに考えてみましょう。

